

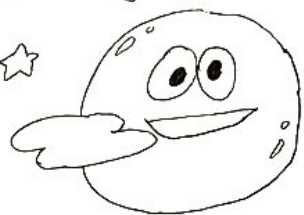
9月号  
vol. 146

とよ・たち美肌通信

砂川勇



# September



今日号のとび下ろ美肌通信の表紙は、

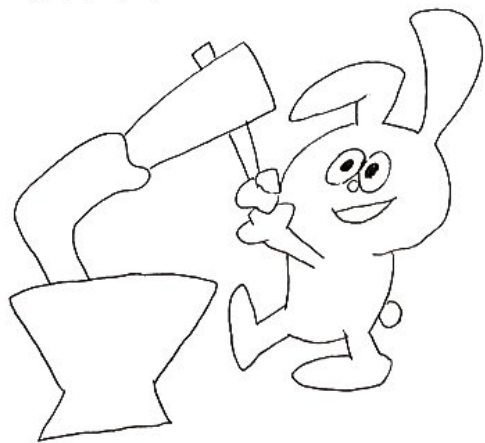
大まな山のにかにまれた、森の中で楽しんでサッカーボールで"あそび"している男の子の絵です。

お天気もよくて、サッカー日和ですね。ニコちゃんTシャツもGOOD!

サッカーをやる事が好きで、サッカーの選手名鑑を読取事や、FIFAのゲームをやる事が趣味なサッカーが大好きな、男の子が描いてくだりました。

得意な事が、都道府県のクイズなのでそうなのよ、

今度、受診してくれた時に、聞いてみようと思います!



大まな表紙をありがとうございます。

院長はじめスタッフ一同

いより感謝いたします♡  
♡

令和4年8月15日、つまり今日は終戦記念日  
です。昔の私は終戦記念日とか8月6日と9日の  
広島長崎への原爆投下を、私自身や私の人生に投影し  
拝察することは少なかつたが、54歳ともなつた今日では  
先の大戦で起つた全ての不幸はいかばかりかと思ふ  
所です。

数々のカタルストロフィの中のほんの一瞬を日記録に残し  
た写真 それは現在、「焼き場に立つ少年」と  
呼ばれている一枚の写真。原爆投下後の長崎で、死んだ  
弟の妹を背負い、臨時の火葬場の前に直立不重力で立  
ち口唇を噛み締めている…。更にその口唇からは血が滲  
み出ています。まるで一家足るや一國任を背負う覚悟で生  
きていたと想像できます。これで生死一如の姿なのだと  
感じます。  
しょうじ いちによ

戦勝国であるアメリカは、焼け野原となつた日本へ軍人  
カメラマンを派遣しました。特に広島長崎は人類が初めて  
使用した原子爆弾投下後の記録として最重要エリアたつたこと  
は言うに及びません。前述の「焼き場に立つ少年」は  
ジョーオグネル氏が撮つたものです。彼の公務で撮つた  
写真は全て軍に回収されましたが、私用カメラで個人的  
に撮影したものは、それを大切に保管し、1989年から  
2007年に亡くなるまで、彼の母国アメリカや日本又は世界

各国で彼自身の反戦反核活動と共に、ゆるぎない視覚的な真実としてその役割りを果たしてきました。

彼の写真集は彼の妻に編集され「神様のファイター」という著書となっています。その一節を紹介します。

■ 佐世保から長山峠に入った私は小高い丘の上から下を眺めていました。すると白いマスクをかけた男たちが目に入りました。彼らは六十センチほどの深さに掘った穴のそばで作業をしています。やがて、十歳ぐらいの少年が歩いてくるのが目にとまりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中に負っています。弟や妹をおんぶしたまま広場で遊んでいる子どもたちの姿は、当時の日本ではよく目にする光景でした。しかし、この少年の様子はは、きりと違っています。重大な目的をもってこの焼き場にやってきたという強い意志が感じられました。しかも裸足です。少年は焼き場のふちまで来ると、硬い表情で目を凝らして立ち尽くしています。背中の赤ん坊はぐらぐらと眠っているのが、首を後ろにのけぞらせていました。

少年は焼き場のふちに五分か十分も立っていたでしょうか。白いマスクの男たちがおもむろに近づいて赤ん坊を受け取り、ゆくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。まず幼い肉体が火に焼けるジュという音がしました。それからまばゆいほどの炎がさっと舞い上がり、真っ赤な夕日のような炎が、直立不重力の少年のまだあどけない頬を赤く照らしました。その時です。炎を食い入るように見つめる少年の唇に血がにじんでいるのに気がいたのは。少年があまりきつかがみ締めているため、血は流れることもなくただ少年の

下唇に赤くにじんできていました。夕日のような炎が金真まると、少年はくるりときびすを返し、沈黙のまま焼き場を去っていきました。■

ジョーオダネル氏の言葉です(神様のファイターから)。  
「アメリカの少年には、とてきこんなことはできないだろう」。  
ジョーはこの光景を目にしたとき、戦争や軍国主義の影響がこの様な小さい子供にまで及んでいることを感じずにはおれなかつたそうです。 院長, 拝

※この内容に関して次号に続く